

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

《人社系》

●立命館大学国際関係研究科国際関係学専攻

「国際協力の即戦力となる人材育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

プログラム期間中、共同修士学位プログラム (DMDP) の新規提携について、マルメ大学、フリンダース大学、ロンドン大学、グルノーブル大学等の担当者の協議をもった。なお、このうち一部の大学とはその実施に向けた具体的な協議を継続している。なお、すでに協定関係にある大学等とは、共同学位制度としての質的な充実に向けて、協議や調整を断続的に行なった。中でも、アメリカン大学 (2008年度～2010年度)、ロッテルダム大学 ISS (2008年度、2009年度)、グラナダ大学 (2008年度～2010年度)、キョンヒ女子大学 (2008年度) へは期間中、教職員が訪問し、受け入れ、送り出しの質向上に向けた協議を行なった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

DMDP は、日本の高等教育の国際化に大きく貢献するものであると同時に、共同学位としての質の担保の観点から、より丁寧な教育内容の刷り合わせ等が求められるため、学位制度の違いや、教学上の課題に応じて、双方の大学担当者の訪問を含めた丁寧な協議、院生の派遣前中後のサポートなどの充実に取り組んだ。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

DMDP プログラムの適正水準を満たし提携先に留学する院生の数は、GPプログラム期間中、平成 20 年度の 1 名から 2 年目 8 名、3 年目 4 名まで増加した。また、大幅な数や種別の拡大を行えなかったものの、双方の課題をあきらかにしながら、派遣状況の改善を行う等、先進的プログラムとしての実質化を行うことが出来た。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

③キャリアパス形成を支援するための体制整備や、社会的・職業的自立に向けた情報提供

《人社系》

●立命館大学国際関係研究科国際関係学専攻

「国際協力の即戦力となる人材育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国際協力分野への人材輩出にむけた長期的な取り組みとして、平和構築キャリアセミナー、国際機関ワークショップ等の人材育成事業を行い、院生のキャリアパス形成を支援するための体制整備、情報提供を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

平和構築キャリアセミナーでは、国際協力分野でのキャリア形成を希望する院生に有益な情報を提供するべく、研究機関や国際NGOのほか、マスコミ、政府関係機関など、多方面から招いた若手を中心とする講師に、自身の職務やキャリア・パスについてお話頂いた。毎回多くの院生が参加したため、院生と講師との質疑応答に時間を割いた。国際機関ワークショップでは、実際に国際機関で勤務した経験を持つ教員が直接指導を行い、今後の学修に関するアドバイジング等を実施するとともに、実際に開発の現場で活用されているPCMの実習を行うなど、の取り組みを行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

当該情報提供を通じて、実際に、国際援助機関やNGO、社会的企業の現場で活躍する修了生を輩出できた。また、研究科としてもそういった修了生を招いて実施するキャリアセミナーを継続して実施することとしており、今後の研究科が実施するキャリア形成支援の一層の充実に寄与するものとなった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

F. その他

③積極的な情報提供体制の確立

《人社系》

●立命館大学国際関係研究科国際関係学専攻

「国際協力の即戦力となる人材育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

プログラムの実施状況や、「国際協力の即戦力」を目指す院生・学生への情報提供を行うウェブサイト及びブックレットを、日・英両言語で公開・発行した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

これらのウェブサイトでは、プログラムが実施した様々なセミナーや人材育成の取り組みについて紹介し、これらの成果を共有できるものとなるよう、心がけた。

ブックレットにおいては、院生の研究課題が、国際協力という人材育成上の重点領域にとどまらず分散する傾向にあり、院生間のピアラーニングの契機が削がれがちである本研究科にあって、研究テーマから履修科目、進路にいたる院生の選択を重点領域へと緩やかに方向づけ動機づける効果を期して、本プログラムの趣旨・活動を紹介する小冊子を2年度目に作成し(A5版38頁)、本研究科への新規入学生を中心に配布してきた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

ブックレットは、左頁に日本語で、右頁に英語で同内容の文書を掲載する形をとっているため、日本人院生だけでなく、留学生にとっても、本研究科における教育・研究の経緯・方向性を理解・共有するうえで重要な助けになった。また、ウェブサイトは、プログラム終了後もさらに充実、強化され、本研究科の教育目的、内容や国際関係学に関する情報を適切に提供している。